ふれあい懇談会会議録（令和６年度　原町商工会議所青年部）

団体名　原町商工会議所青年部
開催日　令和 6 年 5 月 31 日（金）
時　間　18 時 00 分～19 時 30 分
場　所　原町商工会議所
参加者　団体関係者 14 名
市長、こども未来部次長、商工観光部観光交流課長、建築部都市計画課長補佐兼街路公園係長、商工観光部商工労政課商業振興係長、復興企画部政策主幹、総務部秘書課長、秘書課広報広聴係長、秘書課広報広聴係員

1　開会挨拶
2　代表者挨拶
3　参加者紹介
⑴市職員
⑵原町商工会議所青年部出席者
4　懇談
⑴市からの情報提供
①「復興の現在位置」
②こども・子育て賑わい創出エリア（仮）構想の策定
⑵意見交換
①サマーフェスタに対して市との連携
②北泉海浜総合公園の開発について
③相馬野馬追に関すること（子供たちと野馬追の関りについて）
7　閉会挨拶

令和６年５月３１日　開催

ふれあい懇談会発言事項一覧　　団体名：原町商工会議所青年部

No.	発言者	発言内容	回答者	回答事項
1	青年部	児童数の減少に伴い、学校の合併を予定しているとのことだが、対象は小学校のみか。	市長	現在は小学校の合併のみの予定である。 クラス替えができる人数を目安としている。 中学校はいくつかの小学校が集まり構成されていることから、現時点では合併を考えていない。 一部の地区では、小中共に人数が少なくなることが予想されるため、次のステップとして小中一貫校なども検討していく考えである。
2	青年部	こども・子育て賑わい創出エリア（仮）構想の認定こども園について、私立の園児を確保するために、公立では学区を制限する運営を行っていると聞いたことがあるが、そういったことはあるか。	市長	残念ながらこどもの数が減少し、各園などで定員割れを起こしているのは事実である。今回開園を予定している認定こども園は、市が補助を出し民設民営で行っていくものである。市と民間で協力していきたい。
			こども未来部 次長	市全体のこどもの数を考慮しながら運営している。そのため認定こども園ができた際には、現在運営しているあづま保育園を閉園する予定である。

3	青年部	小学校などが合併されるにあたり、学区の再編も視野にあるのだろうか。	市長	合併の際には見直しの必要があると考えている。合併により、徒歩通学が困難な児童のためのスクールバスの運用や、現在市が設置しているバカロレア教育で英語中心の教育を受けたいかどうかなども考えられる。そういった場合に、ある程度学校を選択できるように学区を緩めて柔軟に対応したいと考えている。
4	青年部	市では、少子化の対策としてこども育成分野に力を入れているが「さあ、行っといで。」事業（巣立ち応援18歳祝い金支給事業）はその流れと矛盾しているのではないか。	市長	市内で18歳以上を対象とする教育機関は2カ所しかない。学びたい場合は市外へ出る必要がある。 18歳の方を市で囲い込むのではなく、外に行って広く勉強してきてほしいと考えている。そのうえで南相馬市を選んで帰ってきてほしい。その人たちが市に戻ってくるには、市を出るまでにいかにこの地域の良さを親や周りの大人が伝えられるかどうかが勝負だと感じている。戻ってきやすいように、小さいうちからこの地域の良さを教え、自主的に戻ってくることを期待している事業である。
			こども未来部 次長	市外へ出る人だけでなく、地元で働く18歳の方も含めたすべての18歳を応援する事業としている。 「さあ、行っといで。」のフレーズについても「おかえり」が連想できるとして採用したもの。市外へ出た方々に、戻ってきたいと思ってもらえる地域にするのは大人の役割だと考えており、そうしたことを地域全体で共有したいという思いから事業化したものである。

6	青年部	市から移住定住者の推移について話があった。移住する地域としては3区の中でどこが一番多いか。	市長	移住者全体の8割が、暮らしやすさという点で原町区に移住している。 移住してくる人の中でも、会社に勤める人は原町区、自ら事業を始める人は小高区に移住する傾向がある。 今後は鹿島区でもサービスエリア周辺地域などの開発などをきっかけに、移住者が増えていくような仕組みを考えたい。
7	青年部	市から子どもの数の推移について話があった。以前市長が話していた際は「現状維持もしくは微減に留めたい」との考えだったが、本日の説明では、2010年からすると2023年は約半分になるとのことだった。今後はどういった対策をしていくのか。	市長	統計の数字を見ると、年々減少しており、今後も減少が見込まれている。 子どもの数に関連付くのが、女性の数と出生数である。現在の女性の数と出生数を統計的にみると、必ず現在算出されている数よりも少なくなるだろう。 そうならないために、移住、暮らし、医療、教育水準など、より良くしていかなければならない。そのため、小児科入院の再開や、周産期医療体制を整えた。また、教育水準を上げる取り組みも行ってきた。 震災から今までは必要なものを揃える段階だったが、今後は楽しさを視野に入れた街づくりを目指していく。買い物ができる場所や、映画館、ファストフード店などが必要となると考えている。他にも、他の地域にはないこの地域ならではのことができることも大切だと考えている。しかし、それは行政だけでは難しい。 1人出産した人に、もう一人安心して出産できる環境作りが必要だと感じている。若い人に、安心して産めるところだと知ってもらうことが必要である。 全国的に見ても、ベットタウンと呼ばれる場所は人が増える傾向にある。本市の周辺には本市以上に大きな自治体はないため、本市にどれだけ仕事を造るかが肝心だと考えている。

8	青年部	今年から相馬野馬追が5月開催となり、市内最大の夏のイベントはサマーフェスタになった。 市も一緒に盛り上げてほしい。 市内の花火大会は、原町のサマーフェスタと小高の火の祭りだろう。規模は小高の火の祭りの方が大きいと感じている。原町区は人口が三区の中で一番多いものの、大きなお祭りはない。サマーフェスタを原町区の代表となるお祭りにしたい。地域のお祭りは幼少期の思い出となり、成長して市外に出た際も、帰省するきっかけになる。	市長	暮らしたくなる街を目指す際、行政と民間で一緒に協力していくことが大切である。 現在行政主導で行っているのは、相馬野馬追、野馬追マラソン、植樹祭、健康福祉祭りなどである。 その他各区の春秋まつりなどは、各区の団体などが尽力している。市職員が実行委員会や商工会に混ざってつなぎをしている場合もある。 市としても地域の活性化につながるため各地でのお祭りは是非やっていただきたい。また、「やりたいから支援してほしい」など声を上げてくれると、行政側も行動に移しやすい。サマーフェスタについては、商工会議所が中心となって実行してくれており、大変ありがたいと感じている。 近年はコロナ禍だったことで、地域のお祭りに対し国が補助していたが、今後はその補助がなくなるため、行政の支援も縮小されるようになる。
9	青年部	サマーフェスタについて、全体の見積もりができ、現在開催に向け準備している。地元の協賛金と商工会議所青年部で予算を捻出している。市からの補助を検討いただきたい。	市長	相馬野馬追の際に行われた宵祭りがヒントになると考えている。地域の活性化につながるものなので、市で開催資金の半分を補助した。基本は地域の協賛金がベースとなるが、足りない分は市の補助で補う形である。協賛金と市の補助の比率は最大でも半々となる。 また、国の補助をお願いするのには申込の期間がある。なるべく早めに事業計画などの書類を市の担当課へ提出してほしい。 ⇒上限200万を目途に、補助の予定。
10	青年部	今後の相談となるが、サマーフェスタの実行委員会に市職員が参加することは可能か。	市長	可能。宵祭りでは実行委員会に市職員が参加していた。

11	青年部	北泉海浜総合公園の開発について、今年度2月までに、市に提言書を提出する予定である。 ぜひ地元の人間の声を開発に取り入れて頂きたい。	市長	ぜひ提言書は提出してほしい。 現在の市は、復興で必要なものを整えてきたが、今後はある程度欲しいものを造れる段階になったと先程も話に上げた。 北泉海浜総合公園も、元々あったものを再興するだけでは時代にそぐわないと考えている。北泉付近には貝塚などの文化財も多くあるため、そういったものも組み込むなど、何ができるか現在検討中である。 また、既に市民から多くの意見が出てきている。限られた予算や場所で実現可能なことも限られてくるため、提出いただく内容は、優先順位がついているとありがたい。 検討委員会は9月、10月で閉じる予定なので、今年度2月の提出では意見を反映できない可能性がある。早めの提出をお願いしたい。
12	青年部	北泉海浜総合公園の開発の提言書については、本年6月以降に、政策提言委員会で提言に向けたグループディスカッションを予定している。 そこに市職員が混ざることは可能か。 行政と歩み寄りながら行っていきたい。 単年度ではなく、先を見ながら数年かけ提言できればと思う。	市長	可能。開催日時を教えていただければ担当が参加できる。 現段階では、まずは現状説明から行うことになるだろう。 意見交換などは、テーマを絞って実施したいと考えている。
14	青年部	幼少期から相馬野馬追にもっと触れ合うことで、文化の継承に繋がると考えている。 相馬野馬追に「参加してみたい」と思うきっかけは、小さいころからの憧れや、知り合いが出場しているなどの周りの影響が大きいと感じている。 そのためには、市の施策よりも環境作りが大切だと考えている。 相馬野馬追の開催日には休校にしたり、学校の授業で乗馬体験を行うなど、様々な手法はあると思うが、市で何かしら取り組む予定はあるか。	商工観光部観光交流課長	現在、配付の資料のとおり「馬との触れ合いの場応援事業」「市内小学校における馬との触れ合い学習事業」「馬と親しむin南相馬」など、馬と触れ合う取組みを行っていることから、ご活用いただきたい。

15	青年部	自分は相馬野馬追に参加しているため、女性が参加できる年齢の上限など、多くの検討事項があることを理解しているが、参加していない多くの市民を含む外部へはそうした内容が浸透していない。また、市民の中でも相馬野馬追自体が苦手な方もおり、そういった参加者と市民の理解に大きな差を感じる。 そのため、参加者と市民や観覧者との対話の場があってもいいと思う。	市長	今年の参加者は約900人、そのうち騎馬は約380騎。そのうちの2%程度が新規参加者であることから、昔からの参加している世帯で成り立っていると言える。しかし、それだけで続けていくのも難しいことを理解している。参加者の多くは参加する際のしきたり等を把握しているが、新規参加者はそれを学ぶところから始まる。また、甲冑や乗る馬の準備、それに伴う馬具など、多くのものを揃える必要がある。市では「初陣世話人制度」などを実施しているが、全く地域に関係がなかった人などが、参加するにはまだハードルが高いと考えている。 野馬追に対しての理解を深めるため、参加者との対話は大変良い案だと思う。
16	青年部	こども・子育て賑わい創出エリア（仮）構想では、子どもの様々な可能性やいろいろな才能を引き出すような事業を組み込んでいると思っている。 この地域は芸能関係を学ぶ施設等が全くない。例えば、ダンスなどを学ぶには都市部へ出ていく必要がある。そうした学びの場についても、商工会議所をもっと活用してもらい、一緒に街づくりができれば良いと思う。	こども未来部 次長	現在構想中のため、皆さんから様々な提案をいただきたいと考えている。 新たな学びの場として作成するため、ぜひ意見をいただきたい。
17	青年部	相馬市は街全体に統一感を持たせるような施策を行っている。 南相馬市ではそういった施策は行わないのか。	市長	街の顔といった観点では、駅周辺を整えた。市街地活性化にも担当を付け、現在考えているところである。 方針がまだ決まっていないため、具体的な動きとなるのはまだ先になる。

18	青年部	街中の街路灯にかかる費用は、商店街が負担している。 今年の野馬追の際に、帰り道が暗かったとの声を聴いた。そういったところもイベント全体のイメージに関わるところだと思う。 商店街では管理に限界があるので、市へ任せたいと考えている。	市長	課題だと感じている。市でも、より防犯灯として街の明かりを増やしたいと考えており、計画的に防犯灯を増やしたいと考えている。 しかし、商店街の街路灯の数は、市の基本的な防犯灯の数よりずっと多いので、全てを市の防犯灯として受け入れることは困難である。 実際に商店街の方々とも相談したいと考えている。

※回答事項の記号「⇒」以降に書かれている内容は市が持ち帰りとした案件について、確認が取れた内容を追記したものです。□